

天神雛のしおり



志太天神の歴史

志太地方の天神雛製作の歴史は古く、幕末期から明治初期頃に現在の焼津市上新田の青野嘉作（あおのかさく）が練天神を作り始め、その後明治前期に嘉作の弟子や、藤枝市横内の大須賀芳蔵（おおすがよしぞう）らによって、わら脰に衣装を着せた、いわゆる衣装着天神（いしょうぎてんじん）が作られるようになったと言われています。初期の衣装着天神は、衣装にピロードといわれる縹子（しゅす）地が使われ、袴や背中には色紙を用いるなど素朴なものが作られ、後にはピロード天神と呼ばれましたが、明治末期には姿を消しています。明治中期からは、衣装の布も金糸などが使われた金襴（きんらん）が用いられ、次第に質も高くなり、明治末期には底板も布に覆われ、豪華な作りになりました。

衣装着天神は、男児の初節句に、天神信仰に基づき「学問ができるように、字が上手に書けますように」と願いを込めて母方の実家から贈るもので、男子一生の守り神とも言われるため、志太地方では次第に大きく立派に作られるようになりました。

初期の志太人形師系譜

昭和時好「志太人形史」より作成

青野 嘉作 (天保8~明治36)	横山 熊蔵 (文久2~昭和17)	横山 賢二
		山田 龜吉
	滝井喜代蔵 (元治1~昭和10)	池谷 常吉
		北村 清
大須賀芳蔵 (嘉永3~大正10)	見原 音吉 (明治11~昭和6)	見原巳之助
		池谷 貞蔵
	敷崎竹次郎 (明治7~昭和30)	敷崎 好光
小宮 常吉 (万延1~昭和14)	小宮 一郎	小宮 小三郎
	小宮 櫻二	小宮 弘一郎
菊川 玉吉 (安政5~昭和8)	菊川 英吉	菊川 英雄

「男子のおひなさま」天神雛

志太地方には、「男子のおひなさま」と呼ばれる天神雛があります。天神雛は、学問の神・書道の神・農耕の神として信仰された天神様・菅原道真にちなんだものです。

男子誕生のお祝いに天神人形を贈る風習は全国的にも珍しいもので、県内でも志太地方と富士川周辺に限られた風習です。とくに志太地方では、5月の端午の節句時には新茶摘みなどの農繁期と重なるため、旧暦の桃の節句（4月3日）の時期に、女の子の親王雛と同時に、男の子の天神雛も飾り、子ども達の無病息災や健やかな成長を願う習わしになっています。



志太天神の特徴

志太地方で作られる大きくて立派な衣装着天神は、志太天神と呼ばれています。

顔は肌色で、眉と豊かな髭が植毛され、金襴の豪華な衣装を着ています。衣装の跳ね上がった袖と、台座のおめでたい松・鶴・亀の蒔絵が特徴です。

新しい天神雛

平成になると、住宅事情や親世代の好みの変化に伴い、大きくてきらびやかなものでないものが望まれるようになりました。そこで、髭は植毛せずに書き髭で白い顔、衣装は有職と呼ばれる地味だが格調のある素材が使われ、大きさもコンパクトにまとめた新しい天神雛も考案されました。

人形の大きさは小さくなりましたが、正絹を中心とした品格の高い布地を使い、長年培った人形師の技を存分に発揮し、黒塗りの台座に豊をしつらえて格調高い作品に仕上がりました。



天神雛製作のようす
(取材協力：小宮人形)

